

このプログラムでは、ミュージアムの基本的な機能を重視した上で、観光振興や地域活性化、人びとの幸福や健康・福祉、社会包摂などに、ミュージアムがどのような役割を果たすことができるのか。ここに注目して進めています。この立場は、文化芸術基本法の改正後に出された文化芸術推進基本計画で謳われている、文化芸術の「本質的価値」だけでなく、「社会的・経済的価値」にも着目していくという考え方に通底しています。

しかしここで、ミュージアムを「課題解決型」機関とみるか、「価値創造型」機関とみるかで、その後の展開が異なると考えます。例えば、文化芸術分野ではないですが、わかりやすい事例として就労支援施設を考えてみます。この施設が目指していることと、利用者やそのご家族が叶えたい状況はほぼ一致していると思います。つまり、どちらも就労先が見つからないという課題を解決する方向に向かっています。一方でミュージアムでは、運営側と利用者とは必ずしも同じ目的や目標を抱えているわけではないことは容易に理解できます。ミュージアムが声高に「地域の社会的な課題を解決します」と言った瞬間から、関心がすうーっと冷めてしまう利用者層が一定程度いることは確かだと思います。

前者の例では、共有しているアウトカム(成果)に向かって、PDCAサイクルを作りながら計画的に事業を進めることができます。しかし後者の例では、運営側だけで決めた目指すべきアウトカムでは、そこから漏れ落ちてしまうアウトカムが相当あると考えます。それに気づかずにはまたは無視して事業を進めることは、利用者や地域住民が抱く価値を十分に拾い上げずに運営することになるでしょう。

ミュージアムから創造される価値は多様です。その価値をステークホルダーとともに認識し合うことも、ミュージアムの「社会的・経済的価値」の創造につながると考え、これまでもこれからも、このプログラムを進めたいです。

2023年度も、多くの方に支えられて、プラス・ミュージアム・プログラムの事業を終えることができました。もちろん、昨年度もさまざまな方からお力添えをいただいていたのですが、事業が進むにつれて、御礼を伝えるべき「多くの方」の範囲がますます広がってきているように感じています。

ごく小さな例ですが、たとえば、2023年9月に訪れた北海道夕張市の拠点複合施設「りすた」では、到着してすぐに、年配の見知らぬ女性に声をかけていただきました。買い物袋を提げ、施設内でバスの時間を待っていたこの女性から、「夕張に来てくれてありがとう」と言っていただけたことが忘れられません。あるいは、北海道厚真町の軽舞遺跡調査整理事務所でのイベントでは、帰り際に、お世話になった地元の学芸員さんやボランティアの皆さん、社会福祉協議会の方たちなどが手を振って見送ってくれました。ほかにも、イベントの休憩時間中に声をかけて

くださる参加者の方や、終了後の打ち上げにまで付き合ってくださいる講師の皆様など、色々な方のお顔が思い浮かびます。

2023年度は、こうした小さな出会いを積み重ねながら、色々なところで、ミュージアムに携わる人たちの「顔」がみえてきた一年であったように感じています。ミュージアムに集まる人たちは多様です。その人たちがミュージアムに抱く想いや、ミュージアムとの距離の取り方も千差万別です。その多様さがひとつの場所に同居しながら、ほどよい距離感でお互いを認め合う。そこに、ミュージアムの居心地の良さの一端が潜んでいるような気もします。願わくは、プラス・ミュージアム・プログラムという場もまたよい出会いの場になることを祈りつつ、3年目となる2024年度も頑張っていこうと決意を新たにしています。

プラス・ミュージアム・プログラムの1年目と2年目では、ミュージアムに関わる各領域の専門家をお招きして、ミュージアムが求められる多様な役割および地域社会が直面する諸課題に対して、ミュージアムが寄与できる可能性について考えてきました。また、北海道内のミュージアム学芸員と関係者を対象に、インタビュー・シリーズ「Insight on Site 地域とともにあるミュージアムの現場に学ぶ」も実施しました。その中で、現場にいる学芸員は、ミュージアムの機能に基づき、それぞれの専門性を超えて、一人ひとりの要望に応え、地域に寄り添う姿勢が共通してみられます。

これまで、ミュージアムと地域社会の関係性を考えるときに、つついミュージアムをひとつの社会装置として語り、ミュージアム総体の力を期待するあまり、短絡的に社会課題の解決に結び付けようとしてしまうことがよくありました。しかし、各現場での活動に注目すると、社会課題の解決自体が目的ではなく、地域社会の一員としてミュージアムが「ミュージアムらしい」ことをしていれば、地域にいる人々や多様な主体に変革をもたらし、引いては地域の価値創造につながる可能性を感じさせます。

ミュージアムに期待される役割やミュージアムが置かれている経営環境などミュージアム全体に関わる側面だけではなく、各現場で地域に向き合う学芸員や関係者の活動と思いにも着目し、3年目のプラス・ミュージアム・プログラムを迎えたいと考えています。

